検定教科書における小中連携：Unit 0 分析を通して

岩崎 晴海[†]・作井 恵子[‡]
神戸松蔭女子学院大学 大学院言語科学専攻[†]・文学部英語学科[‡]
harumi_iwasaki_luna[at]yahoo.co.jp · ksakui[at]shoin.ac.jp

How English Textbooks Promote the Transition from Elementary School to Junior high School: An Analysis of Unit 0

IWASAKI Harumi[†] · SAKUI Keiko[‡]
Kobe Shoin Women's University Graduate Program in Linguistic Sciences[†]
Department of English[‡]

Abstract

英語教育の早期化および教科化が導入されることになり、今後小学校における英語指導、また小学校での学びをどう効果的に中学校につなげるかという小中連携がますます重要になってくる。本稿では、中学校検定教科書 6 冊の教科書分析を通して小中連携がどう実践されているかを検証する。具体的には、Unit 1 の前にある小学校外国語活動の復習と中学校の英語授業へ円滑に接続することを目的とした課、いわゆる「Unit 0」についての外的分析と内的分析することにより、小中連携について各教科書の特徴をまとめるとともに、今後の小中連携についてのありかたについて考察する。

English will be introduced to younger learners and will also become a proper subject in elementary schools in Japan. From this perspective, the transition from elementary to junior high school concerning English education is becoming increasingly important. In order to explore one aspect of this transition, the current paper examines six junior high school textbooks. Specifically, the paper analyzes the first chapter of each textbook, so-called Unit 0, which is designed to play a transitional role. The results of the analysis show how the transition is carried out in these junior high school textbooks and implications are suggested about the future direction of English education in Japan.

キーワード：英語教育、小中連携、検定教科書、教科書分析、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin, No. 21, 71–84, 2018.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No. 21, 71–84, 2018.

Key Words: English education, transition from elementary school to junior high school, English textbooks, textbook analysis, CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)

1. 英語教育をとりまく環境

日本はこれから稀にみる激動の時代に突入すると言われている。少子化による急激な人口減少や超高齢化社会、IT 化や AI などの技術革新が進む、またグローバル化による異文化間の交流が盛んになり国際的な協力・協調が必要になる一方で、国際間での競争がますます激しくなることが予想され、２１世紀を生き抜くためには、これまで必要とされてきた力に加え、特別な知識・能力が必要になってくると言われている。具体的には、新井（2015）が述べているように、記憶に頼る技能や基本的な作業は、IT や AI が人間の代わりに莫大な量を処理するようになり、２１世紀には、批判的思考力や、問題解決能力、判断力といった高いレベルの認知力が必要とされ、また協働して作業を行う、異文化の人たちともコラボレーションをしていくなど、これまでとは異質の能力が必要になってくる。これをうけて、現行学習指導要領にある「生きる力」を育てるという基本方針が新学習指導要領でも掲げられている（文部科学省　2017）。

具体的に外国語（英語）では、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画として、こういった社会変化に対応できる教育環境が整備されることとなった (文部科学省, 2013)。その具体例として学習指導要領が大きく改変され、小学校では中学年で外国語活動として早期化が、高学年では外国語科として教科化が本格的に始まり英語教育がますます注目を集めている。ここで現在の段階で一番懸念になるのは、高学年で教科として英語が教えられること、またこの動きと中学校での英語指導との連携である。小中連携についてはこれまでも多くが語られ研究されてきたが、この連携について教科書を用いて考察したものはあまり数が多くない。本稿では早期化・教科化を踏まえ現時点では小中連携がどのように具体的に行われているかを、主に小学校の復習を目的とした中学校検定教科書の最初の課を分析することにより小中連携をどうとらえるべきかを考察してみたい。

2. いわゆる **Unit 0** の意味

現行の学習指導要領では、小学校５，６年生の外国語活動においては、「話す」「聞く」という言語活動を通して、英語に慣れ親しみ、英語学習の素地を作るとされている。それを受けて中学校では、「話す」「聞く」に加え「読む」「書く」という４技能が導入され、生徒は、「話す」「聞く」といったコミュニケーションに加え、初めていわゆる英語のリテラシーを学ぶことになる。この小学校と中学校のつなぎの働きをしているのが、中学校の教科書の Unit 1 の前にある、本稿で総称するいわゆる「Unit 0」である。例えば Sunshine（開隆堂出版、2016）では、この Unit 0 に当たる課の「Let's Start」を小学校外国語活動と中学校での英語学習を円滑に接続する入門期と位置づけ、小学校外国語活動で学んだあいさつや、主に聞き取りをするアクティビティーを多く取り入れて、生徒に理解できる、することができるという自信を持たせることをねらいとしている。また、身の回りでよ

く目にする英語の看板を使い、文字を読みたいという意欲を高めたいとしている。さらに、生徒同志が学び合う仲間づくりや学習環境をつくるために、インタビュー活動も取り入れている。先述のように本稿ではこの Unit 0 を分析することによりこれからの小中連携について分析し、それが示唆するものを探りたい。各教科書会社の Unit 0 の分析に入る前に、簡単に検定教科書についての概観を述べておきたい。

3. 検定英語教科書について

日本の学習指導要領にそっているカリキュラムでは、民間の出版社・著者による教科書が作成され、文部科学大臣の検定をうけたのち、日本の小学校、中学校、高等学校および国外に存在する日本人学校などを含む学校で、検定教科書として使用されている（小串, 2011）。換言すれば、国の教育指針を理解、具象化し、それがふさわしいと認められた教科書が用いられて、各教科の指導が日本全国で行われているということである。さらに具体的には、小串 (2011) によると、検定教科書には次の３つの特質がある：１）使用義務、２）学習指導要領準拠、３）主たる教材という点である (p. 21)。１）については、小学校、中学校、高等学校では、学校教育法により検定教科書を使用することが義務付けられている。２）では、検定教科書の内容は、それぞれの校種の学習指導要領が示す「目標」や「言語材料」「言語活動」にそった内容にあるべきであり、それに従っていないものや不要なものは含まれるべきではないとされている。３）においては、１）、２）の理由より検定教科書が使用上主な教材として使用されるべきであると明記されている。これと同時に、英語教材はいろいろな観点、指導法、目的にあったものが多数出版されている。「主たる」というのは、こういった教材を排斥する必要はなく、教員が補助教材としてふさわしいと認めれば適宜使用してよいという教材選択に幅をもたせるという解釈である。

本稿では、中学校検定教科書の中学校英語科を分析することにより、小学校から中学校への連携を探ることを目的としている。小中連携については、後述する新学習指導要領を理解・実施するうえでも大切な論点であり、新学習指導要領が施行される前に、現段階として小中連携がどう検定教科書に具象化されているかを分析することは、2020 年からの新しい英語教育を推進するうえで非常に大切な点であると思われる。

現在、出版されている中学校英語の教科書 6 冊を取り上げいくつかの観点から分析および概観し、そこからみえる小中連携のありかたを探ってみたい。

4. 教科書分析の観点

本稿では教科書の分析をまず外的・内的分析にわける。外的分析はページ数やデザインなど表面的に教科書を比較することで、内的分析は主に各教科書の学習目標、言語材料および言語活動、コミュニケーションのとらえ方（特にインプット・アウトプット・インタアクションのバランスおよび文法について）について分析することを目標とする。

1. 外的分析

2. 内的分析

① 学習目標について

② コミュニケーションのとらえ方（インプット・アウトプット・インタラクションのバランスおよび文法について）

4.1. 教科書の外的分析

下記は各教科書会社別に Unit 0 にあたる各課を分析したものである。課の名称が示すように、各出版社はそれぞれこれから中学校での新しい英語学習が始まるという意を表し、“Start”, “Get ready”, “Springboard” といった意味の英語を用いて表現しているところは似ている。本稿で取り上げた Unit 0 という名称は実は New Horizon だけで用いられているものであるが、この課の性格を一番わかりやすく描写しているものとして本稿では総称として Unit 0 という名称を使用することとする。

各教科書がこの初課に割くページは、ほぼ 15 ページ前後で似通っているが、開隆堂出版の Sunshine は唯一 8 ページと他社の教科書と比較し半分の量しか割いていないことがわかる。

表 1: 各教科書の外的分析

タイトル	出版社	Unit 0 にあたる課の名称	ページ数	配当時間
Total English	学校図書（株）	Pre-lesson, Let’s Start	15	9
New Horizon	東京書籍（株）	Hi, English!, Unit 0	13	6
One World	教育出版（株）	Springboard	16	7
New Crown	（株）三省堂	Get Ready	12	6
Columbus 21	光村図書出版（株）	Let’s Enjoy English!	14	8
Sunshine	開隆堂出版（株）	Let’s Start	8	3

Sunshine は他社の教科書と比べ、ページ数と配当時間が 2 分の 1 から 3 分の 1 くらい少ないと言える。Total English と New Horizon は Unit 0 にあたる課を二段階にし、主に小学校外国語活動の復習パートと文字指導のパートに分けてある。Unit 0 には具体的にどういうことが盛り込まれているかを次の内的分析で取り上げる。

4.2. 教科書の内的分析

4.2.1. 学習目標について

まず内的分析として各教科書について学習目標を比較してみたい。ここでは目標を掲げるうえで、この初課終了時に生徒が何ができるようになっているかという達成目標を理解するためにヨーロッパ言語共通参照枠（以下 CEFR と称す）に基づいた CEFR-J（投野、2013）を参考にし、これと比較することにより各教科書の相違点について探ってみたいと思う。

各教科書の分析に入る前に、CEFR について簡単に記述する。CEFR は、第二次世界大戦後に設立された欧州評議会により提唱されたもので、言語運用能力の全体的な尺度である。欧州評議会は、第二次世界大戦で被害が全土に及んだ欧州で人権の尊重、平等の精神を維持することや、民主主義を擁護することなどを目的として設立され、社会、文化、教育や言語教育などについて取り組んでいる。CEFR 作成の目的は、「欧州評議会の会員国で言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教材などの質的向上のために共通の枠組み、記述レベル、指標を学習者、教育関係者に提供すること、さらに効果的にコミュニケーション行動ができるための知識、技能を記述すること、そして言語が置かれている文化的なコンテクストを記述の対象に、学習者の熟達度のレベルを記述し、学習進度を測定できるようにすることであった」（投野、2013、p.11）。CEFR は、複言語主義と複文化主義を理解する能力を身につけることを促している。CEFR は、学習者の言語運用能力を A（Basic User）、B（Independent User）、C（Proficient User）のレベルに分け、さらに各々を二段階に分けている。一番下のレベルから A1、A2、B1、B2、C1、C2 と 6 つのレベルになっており、言語を用いて何ができるのかという CAN-DO で表した言語能力記述文が書かれている。

CEFR はヨーロッパをコンテクストとして作成されたものであるが、一方、日本人の学習者は初級者が多い状況であるため、CEFR の初級者のレベルである A1、A2 レベルの記述文では不十分であるという認識のもと、CEFR に準拠し日本における英語教育の枠組みに合うように CEFR-J が開発された。CEFR では、A1 レベルは「すでに日常会話での基礎的な表現やフレーズをある程度は理解したり使ったりできるレベルである」（投野、2013、p.93）ため CEFR-J では、A1 を細分化し、またそのレベルに至る前の Pre-A1 を設定した。レベルは、一番下から Pre-A1、A1.1、A1.2、A1.3、A2.1、A2.2、B1.1、B1.2、B2.1、B2.2、C1、C2 の 12 段階に分かれている。

本研究では、初級者レベル対象の教科書分析であるので、CEFR および CEFR-J を参照して各テキストの Unit 0 が到達目標をどこまでにしているのかを検証する。

4.2.1.1　聞くこと　レベル：**Pre-A1**、**A1.1**

聞くことについての CEFR-J の Pre-A1 レベルは、自宅や教室、外で見かける身近にあるものの主に単語レベルの聴解と、アルファベットの発音を聞いてわかるという能力レベルである。A1.1 レベルは、「立て」などの短い簡単な指示を聞いて理解することができることと、数字や曜日などの日常的で基本的な情報がわかると定義されている。

聞くことを調べた結果、Pre-A1 レベルと A1.1 レベルに当てはまるものがある。Pre-A1 レベルの「ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる」ことに関しては、6 冊全ての教科書で目標にしていることがわかった。「英語の文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる」については、6 冊の教科書はすべて当てはまる結果になっている。但し Sunshine は文字指導が Unit 0 には入っていないので、「英語の文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。」という項目に ✓ を入れるには不十分であると判断した。しかし、聞いたり、話したりする活動で文字も提示されているた

め、Δ とした。

A1.1 レベルの「立て」「座れ」「止まれ」といった短い簡単な指示を理解することができることに関しては、3 冊の教科書が目標にしていることがわかった。New Horizon と One World では教室で使う英語で学習することになっており、Sunshine ではアクションタイムという英語を聞いて動作をするところにある。一方、Columbus は Unit 0 に教室で使う英語のページはあるが、これらの指示は含まれていない。Total English は Unit 0 の前にこれらの指示を含む教室で使う英語のページがある。New Crown は Unit 0 の後に付録として教室で使う英語の記述があるが、「立て」「座れ」「止まれ」といった指示はない。「日常生活に必要な情報を、ゆっくりはっきりと話されれば、聞きとることができる」ことに関しては、4 冊の教科書が当てはまるものがある。New Horizon が一番多く扱っており（数字、曜日、日付)、次が One World（数字、曜日)、Columbus と Sunshine は数字のみを学習することになっている。Total English と New Crown は A1.1 レベルをねらいとしたものはないことがわかった。

表 2:「聞くこと」について

		TE	NH	OW	NC	CB	SS
Pre-A1	ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる	✔	✔	✔	✔	✔	✔
	英語の文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。	✔	✔	✔	✔	✔	Δ
A1.1	当人に向かって、ゆっくりはっきりと話されれば、「立て」「座れ」「止まれ」といった短い簡単な指示を理解することができる。	✔*0	✔	✔			✔
	日常生活に必要な重要な情報（数字、品物の値段、日付、曜日など）を、ゆっくりはっきりと話されれば、聞きとることができる。		✔*1	✔*2		Δ*3	Δ*3

*0: Unit 0 の前にある *1:数字と曜日あり、日付については少し *2: 数字と曜日 *3: 数字のみ

例えば One World では、身の回りの英語について聞いて、ペアかグループで聞こえた英語の絵をタッチし、早くタッチできた人が勝ちというタッチングゲームなどのアクティビティーをしながら学習する。これは、Pre-A1 の「ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる」に当てはまる。

4.2.1.2 読むこと レベル：**Pre-A1**

読むことについての Pre-A1 レベルは、小学校外国語活動などで音声に慣れ親しんだ単語を絵本から見つけることができること、ブロック体で書かれた大文字・小文字を認識できるという能力レベルである。

読むことを調べた結果、「口頭活動で既に慣れ親しんだ絵本の中の単語を見つけることができる」ことに関しては、教科書においてはサイトワードとして捉え調べた結果、6 冊

全ての教科書ができることを目標にしていることがわかった。「ブロック体で書かれた大文字・小文字がわかる」ことについては、6 冊中 5 冊の教科書ができるようになることを目標にしているが、唯一 Sunshine だけは、できないことが明らかになった。これは、文字指導が Unit 0 にはないからである。

表 3: 「読むこと」について

		TE	NH	OW	NC	CB	SS
Pre-A1	口頭活動で既に慣れ親しんだ絵本の中の単語を見つけることができる。	✔	✔	✔	✔	✔	✔
	ブロック体で書かれた大文字・小文字がわかる。	✔	✔	✔	✔	✔	

4.2.1.3　話すこと（やりとり）レベル：**Pre-A1**、**A1.2**

話すこと（やりとり）の Pre-A1 レベルは、基礎的な語句を使用して自分の思いや要求を伝えることができる、定型表現を用いて挨拶したり、それに応答したりすることができる能力レベルである。A1.1 レベルは、なじみのある定型表現を使って、時間や日にち、場所などについて質問したり、答えたりすること、家族、日課などの個人的なトピックに関して基礎的な文を使って、質問したり、それに答えることができる能力レベルである。A1.2 レベルは、基本的な語や定型表現を使用して、個人ができることや色について簡単なやりとりができること、好きなもの、きらいなものなどの馴染みのある個人的なトピックについて簡単な意見交換をすることができる能力レベルである。

話すこと（やりとり）を調べた結果、Pre-A1、A1.1、と A1.2 レベルに当てはまるものがある。Pre-A1 レベルの自分の要求を伝えることや、意思を伝えることを目指したものがある教科書は 3 冊あり、One World では “Do you want a blue pen?” “Yes, I do. / No, I don’t” などと質問し合い、答える活動がある。New Horizon と Columbus は教室英語として質問があることを伝えたり、聞き返したり、つづりを質問したりするので Δ とした。挨拶に関しては、5 冊の教科書ができることを想定していることがわかった。唯一 New Crown だけは、話すこと（やりとり）の Pre-A1 レベルの二つの記述文に当てはまるところがない。A1.1 レベルの「なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる」については、New Horizon が、誕生日を質問し、答える練習のみあるので Δ とした。他の 5 冊の教科書には当てはまるものがなかった。「家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、（必ずしも正確ではないが）なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる」については、6 冊すべての教科書が該当するところがなかった。

A1.2 レベルの「基本的な語や言い回しを使って日常のやりとり（何ができるかできないかや色についてのやりとりなど)、において単純に応答することができる」については、3 冊の教科書が目標にしていることがわかった。「スポーツや食べ物などの好き嫌いなどのとてもなじみのあるトピックに関して、はっきり話されれば、限られたレパートリー

を使って、簡単な意見交換をすることができる」に関しても、3 冊の教科書ができることを想定している。その 3 冊のうち、New Horizon と Sunshine が能力記述文の二つともに当てはまる。一方、Total English と Columbus は当てはまるものがなかった。A1.1 レベルにあたる学びがわずかで、A1.2 レベルに該当する学びを入れている教科書の方が多い。A1.2 のレベルは自分自身についてのことを表現し、やりとりする能力であり、A1.1 は自分のことだけでなく、自分以外の人や物事について表現する、つまりもう少し対象が幅広くなっている。このことから、CEFR-J と教科書が目標とする能力の段階に少し違いがあるようである。

表 4:「話すこと（やりとり）」について

		TE	NH	OW	NC	CB	SS
Pre-A1	基礎的な語句を使って、「助けて！」や「〜がほしい」などの自分の要求を伝えることができる。また、必要があれば、欲しいものを指さししながら自分の意思を伝えることが出来る。		Δ	✔		Δ	
	一般的な定型の日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に応答したりすることができる。	✔	✔	✔	✔	✔	
A1.1	なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。		Δ*1				
	家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、(必ずしも正確ではないが) なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。						
A1.2	基本的な語や言い回しを使って日常のやりとり（何ができるかできないかや色についてのやりとりなど)、において単純に応答することができる。		✔	✔			✔
	スポーツや食べ物などの好き嫌いなどのとてもなじみのあるトピックに関して、はっきり話されれば、限られたレパートリーを使って、簡単な意見交換をすることができる。		✔		✔		✔

*1 誕生日をたずね、答えるのみ

4.2.1.4 話すこと（発表）レベル：**Pre-A1**

話すこと（発表）の Pre-A1 レベルは、簡単な語彙や基礎的な表現を使用して、自己紹介ができること、前もって話すことを準備した上で、基礎的な語句、定型表現を使って、実物などを提示しながらそれについて説明することができる能力レベルである。

話すこと（発表）の「簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてのごく限られた情報（名前、年齢など）を伝えることができる」については 6 冊すべてに当てはまる箇

所がある。5 冊の教科書に自己紹介をすること、もしくは自分の名前と好きなものを伝える活動があり、自分についてのごく限られた情報を伝えることができることに当てはまる。Columbus には、自己紹介をする活動がなく、数字を学習するところで、自分の電話番号を伝える指示があるので Δ とした。前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物などを見せながらその物を説明することに関しては、どの教科書もねらいにしていないことがわかった。

表 5:「話すこと（発表）」について

		TE	NH	OW	NC	CB	SS
Pre-A1	簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてのごく限られた情報（名前、年齢など）を伝えることができる。	✔	✔	✔	✔	Δ[*1]	✔
	前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物などを見せながらその物を説明することができる。						

*1 自分の電話番号を言うのみ

4.2.1.5　書くこと レベル：**Pre-A1**

書くこと Pre-A1 レベルは、アルファベットの大文字・小文字、簡単な単語をブロック体で書くことができる、単語のつづりを 1 文字ずつ聞いてそれを書くことができることや文字を見て写すことができる能力レベルである。

書くことについて調べた結果、5 冊の教科書がアルファベットの大文字・小文字、単語のつづりをブロック体で書くことができることをねらいとしている。Sunshine だけは文字指導が Unit 0 にないので、書くことが目標になっていない。単語のつづりを 1 文字ずつ発音されれば、聞いてそのとおり書くことができる、また書いてあるものを写すことができることに関しては、4 冊の教科書にある。また、聞いて書く文字は、Total English では 3 文字単語の 1 文字を書くことになっており、母音と子音が同じ量であり、小文字で書くことになっている。New Crown では 3 つの単語を聞いて共通の子音 1 字を小文字で書く問題と共通の母音 1 字を書く問題が 1 題ずつある。略語を聞いて書く One World と Columbus は大文字で書くことが指示してあり、その文字は子音が多い。書き写すことに関しては、Total English では 3 文字単語を並べ替えて書くことが指示されており、One World では名前と国名をなぞり書きする学びがある。New Crown では国名、名前の書き写し、文字を並び替えて単語を書く指示がある。

また、フォニックス指導に当たるような音とつづりの関係についてを学習目標としているものは、Sunshine 以外の教科書 5 冊全てにあるが、指導の手厚さに違いがある。5 冊ともアルファベットが表す音の違いを認識させるようにしている点は共通しているが、最も丁寧に段階を踏んでいる教科書は、Total English で、初めにアルファベットが表す音の違いを認識させ、hat や pig などの 3 文字単語の文字の音を認識し、big と bag、ten

表 6:「話すこと（発表）」について

		TE	NH	OW	NC	CB	SS
Pre-A1	アルファベットの大文字・小文字、単語のつづりをブロック体で書くことができる。	✔	✔	✔	✔	✔	
	単語のつづりを 1 文字ずつ発音されれば、聞いてそのとおり書くことができる。また書いてあるものを写すことができる。	✔		✔	✔	✔	

と pen などを聞き分ける学びがあり、次に単語を聞いて抜けている文字を書く活動と文字を並べかえて単語を書く。最後にビンゴゲームを用いて単語を書くことで音と文字の関係を確認するようにしている。二番目に手厚いのは New Horizon で、英語を聞いて音とつづりを結ぶ活動や母音と子音について同じ文字でも異なる発音があることを単語を通して学ぶところがある。One world、New Crown、Columbus はアルファベットの表す音を認識させるところに少しだけ単語の中の 1 文字を聞き分ける、あるいは聞こえてきた単語のつづりをキーボードで探す活動にとどまっている。

4.2.2. Unit 0 input, output, interaction のページ数

次にここでは、語学学習の過程を第２言語習得で重要なインプット、アウトプット、インタラクションという観点からも分析してみたい (Ellis, 2005)。本稿ではこの３点を白畑他（2013）を引用し、インプットを「学習者が読んだり、聞いたりして受ける目標言語の全て」(p. 144) とし、アウトプットを「学習者が目標言語を使って話したり、書いたりして産み出される」(p. 217) ものとし、インタラクションを「言葉を通してメッセージを伝え合う双方向 (two-way) の言語活動。」(p. 150) と定義する。

表 7: インプット、アウトプット、インタラクションについて

	TE	NH	OW	NC	CB	SS
Input	15	11	12	10	14	8
Output	12	13	15	8	12	6
Interaction	2	2	4	2	3	4

インプットがアウトプットより多い教科書は 6 冊中 4 冊であった。その差は 2、3 ページで、インプットとアウトプットのページ数はあまり差がなくバランスが取れていると言える。インタラクションのページ数はそれらに比べると少ないが、この活動は、インプットとアウトプットができてこそ可能なので、ページ数が少ないのは妥当である。また、アレン玉井（2010）によれば、あらゆる言語にはルールがあり、それを説明するのが文法であるが、文法の観点から教科書をみてみると、英語の語順、三人称の動詞の変

化や、複数形などをインプット、アウトプット、インタラクションをするうえで明示的に教えているところはなかった。

5. 考察

ここでは検定教科書 6 冊を分析結果をふまえて総括する。まず 6 冊のうち、開龍堂出版の Sunshine は独自のシラバスを貫いており、Unit 0 のページ数が他社 5 冊と比較し半分ほどであること、「読むこと」「書くこと」についてはこの初課ではほとんど扱わず次課以降に、いわゆる小学校の復習・中学校への前段階という Unit 0 ではなく本課で扱うとしている。Sunshine については 1 課以降もその独自のシラバスを持つという姿勢は続き、Total English を除く他 4 社が be 動詞から導入しているにもかかわらず、can 助動詞を be 動詞の前に文法項目として扱っている。動詞の変形という観点、動詞の持つ意味という点からいうと、かなり理にかなった導入の仕方であると言える。つまり、Sunshine では Unit 0 は小学校の復習は「聞くこと」「話すこと」などを重視し、リテラシーは徐々に時間をかけながら導入していけばよいという方針がうかがえる。これは、インプット、アウトプット、インタラクションの割合をみても、この 3 点を比較するとインタラクションの比重が比較的多いことからメッセージをやりとりすることを重要視していると言える。

それでは残りの 5 冊の教科書については分析を通してどういうことが言えるであろうか。スキル別にみると、「読むこと」についてはほとんど差異がみられず Pre-A1 の知っている単語をみつけることができる、という単語レベルの特にサイトワードの能力と、アルファベットを認識するという能力を達成することが目標として掲げられている。同様に「話す（発表）」も、あまり教科書によって相違がなく、自分についての年齢や名前などごく限られた内容を発表できることが目標である。発表は学習者一人がまとまった内容を一方的に伝えるという言語行為であり、ごく初級の学習者であることを考えると、目標とするレベルが高くないのは理にかなった選択であると言える。「書く」ことも基本的にはアルファベットを書くというレベルが共通した目標である。

このようにあまり差がないスキルもある一方、他のスキルでは僅差ではあるがそれぞれの教科書に相違点がみられ、特徴がある。まず「聞くこと」であるが、New Horizon、One World と Sunshine が、単語やアルファベットを聞いてわかるというレベルを目標とする Pre-A1 を超えた点を目標としており、決まり文句、数字や曜日などが聞いてわかる能力までを養成しようとしている。「話すこと（やりとり）」に関しては、New Horizon、One World、New Crown と Sunshine が A1.2 レベルまでの目標を掲げており、決まり文句を使いながら意思の疎通をはかる練習を取り入れている。

それではこれらを総括し、どういうことが言えるであろうか。まず 1 点目はわずかな相違点があるとはいえ、各教科書ともおしなべて 4 技能をとりいれてそれぞれに目標設定していること、小学校での既習事項を復習したりそれを展開し中学校への学びに結び付けているという意図が推しはかられる。この観点からは、その目的が達成しやすいようにデザインされていると言えるであろう。しかし反面、中学校で習うべき文法項目には全くと言っていいほど触れていないことにも気づく。Unit 0 ではあくまでもコミュニ

ケーション重視である学び方も学習項目も小学校の外国語活動に基軸をおいたものであり、中学校の内容やその学び方が取り入れられているとは言い難い。小中連携においては、校種によって学び方が異なり生徒の学び直し、あるいは学び方の接続がスムーズではないためその効果が期待されているほどあがってはいないのではという指摘がある（湯川・高梨・小山、 2008)。田中・眞崎・横山（2013）は、小学校と中学校の接続に関しては小学校の外国語活動において子供たちが英語表現を丸ごと覚え、模倣したりする項目学習から、分析的に処理するシステム学習へ学習型を移行させることが求められると述べている。また、中学校での英語学習は文法が要となっていることを考えると、小学校の外国語活動において音声で慣れ親しんだ表現をこの接続となる課で文の構造を明示し、小学校での音声中心の英語の学びと文の作りに気づきを与えることも必要ではないだろうか。例えば、身の回りの英語を学ぶ活動では、絵と単語だけでなくそれを使う文、I like oranges. She likes oranges. I have comic books. He has comic books. を提示する。友達のことについて言うときなど、主語によって動詞の活用が変わることを明示し、学習させることも必要ではないかと考える。これにより生徒は文の構造に気づくであろうし、1 課以降の正規のカリキュラムの文法学習へのウォーミングアップにもなると考えられる。また英語の文法構造を知ることにより、日本語との違いにも気づき、言語学習へのより深い学びに導くことができるのではないだろうか。アレン玉井（2010）は、文法がコミュニケーションを図るためには大切だとの意識を子供たちが持ち始めることは非常に重要であると述べている。 この観点からするといわゆる中学校での学び方、文法項目、語彙などをもう少し Unit 0 でとりあげ、本当の意味での小中連携を目指し小学校の内容と中学校の内容が融合している観点からのアプローチがあってもよいのではと考える。Wang（2017）は、日本の小学校で 2020 年から英語が教科として教えられるにあたっての問題の一つが教材であると指摘している。教科書が小学校で英語学習をした生徒たちの中学校での英語学習の躓きの一つとならないように内容をよく研究して開発していくことが重要であると考える。

6. おわりに

本稿では中学校検定教科書 6 冊の小学校外国語活動から中学校の英語授業に接続する課である「Unit 0」を外的分析と内的分析をすることにより、小中連携について検証した。結果、各教科書は 4 技能のバランスがとれていることがわかった。また、すべての教科書が「Unit 0」の課を設け、目標設定をして、小学校外国語活動で学習したことを復習したり、中学校での英語学習への移行として文字を導入したりして、中学校への学びにつなげようとしていることは小中連携の観点からみると好ましい。しかし、中学校の英語学習で重要となる文法が明示されているところがあるとは言い難い。小学校外国語活動で英語にふれた子供たちの中学校での入門期の学びをさらに後押しするように、もう少し中学校の内容や学び方を取り入れ、より円滑に小学校と中学校の学びが接続できるような次期教科書に期待したい。

参考文献

新井進一 (2015).「これからの社会で求められる人材、能力と その力の測定について」—国際アセスメントの能力観を通して考える http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2013/03/14/1331872_02.pdf, 2017 年 12 月 3 日.

アレン玉井光江 (2010).『小学校英語の教育法—理論と実践』. 東京：大修館

Ellis, R. (2005). Principles of instructed language learning. System, 33, 209-224.

開隆堂出版「平成 28 年度用中学校英語教科書指導書　SUNSHINE ENGLISH COURSE Teacher's Manual」, 開隆堂出版ウェブサイト, http://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/eigo/h28/shidosho.htm, 2017 年 12 月 1 日.

笠島準一・関典明　他 (2017).『NEW HORIZON English Course 1』. 東京：東京書籍

松本茂　他 (2017).『ONE WORLD English Course 1』. 東京：教育出版.

モロウ, キース（編）(2013).　『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』. 和田稔他（訳）　東京：研究社.

文部科学省 (2013).「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf, 2017 年 12 月 3 日.

文部科学省 (2017a).「小学校学習指導要領」, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf, 2017 年 12 月 3 日.

文部科学省 (2017b).「中学校学習指導要領」, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf, 2017 年 12 月 3 日.

根岸雅史　他 (2017).　『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1 New Edition』. 東京：三省堂.

新里眞男・佐藤寧・高梨芳郎・卯城祐司　他 (2016).　『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1』. 東京：開隆堂出版.

小串雅則 (2011).『英語検定教科書：制度、教材、そして活用』. 東京：三省堂.

白畑知彦 他 (2013).『改訂版　英語教育用語辞典』. 東京：大修館.

田中彰一・眞崎新・横山千晴 (2013).　小学校外国語活動と中学校英語科の接続（1）—現状と課題—.『佐賀大学教育実践研究』, Vol. 29, 25-40.

東後勝明　他 (2017).『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1』. 東京：光村図書出版.

投野由紀夫（編）(2013).『CAN-DO リスト作成・活用　英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』. 東京：大修館書店.

矢田裕士・吉田研作　他 (2017).『TOTAL ENGLISH 1』. 東京：学校図書.

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春 (2008).『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』. 東京：三省堂.

Wang, Wei-Tung (2017). Learning Strategies in Elementary and Junior High School English Textbooks in Taiwan. JES Journal, Vol. 17, 54-68.

Author's web site: `http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2018 年 1 月 10 日）